

---

# 魔法戦記バカテスForce ~ IF ~

レフェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法戦記バカテスForce（IF）

### 【Nコード】

N2084BA

### 【作者名】

レフェル

### 【あらすじ】

この作品は魔法戦記りりなのForceとバカと年上の同級生と僕とちっさい幼なじみのクロスコラボとなっております

ちなみにIF…つまりもしもの世界ですので…先に連載してる話とは別作品です ツグミとリュウセイの甘いラブシーンを期待してください！！

え、なんか違う？細かいことは気にしない

## プロローグ？出会い（前書き）

ツグミとリュウセイの出会いです

## ブローグ？出会い

「くそっ！雨かよ！近くに遺跡があつて助かったぜ」

ずた袋を担いだ青年が、古い遺跡の入り口で雨宿りをしていた。  
身長は200センチくらいであろうと思われる。

『主、遺跡内に生命反応有り』

彼の持つアームドデバイス「マサムネ」が遺跡内に生命反応が有る事を彼に告げる。

形状はハリセン型になっているようだ。

「こんな古い遺跡にか？……第六感にビンビン来やがるな。行ってみるか」

青年は荷物を担ぐと、遺跡内へと向かつて歩き出した。

「随分入り組んだ場所だな。これ本当にただの古い遺跡か？」

『ただの遺跡かまだ不明です』

そんな会話をしながら青年が複雑に入り組んだ遺跡内部を抜け最深部の扉へと辿り着いた。

「『マサムネ』内部の生命反応はどうだ？」

そして、青年は物影に隠れながらマサムネに内部の生命反応を数えてもらう。

『ふむ。男性が5、女性が1。武装反応は無し』

「よし！んじゃ行ってみるか！」

青年はそういつと扉を蹴破り、内部へと侵入した。

其処にはポッドの中に入ったちっこい女の子と白衣を着た男性が5人いた。

「し、侵入者だ！」

「警備は何をしているんだ！」

「それよりもこいつを運ぶんだ」

白衣の男性達が青年を見てざわざわと騒いだ。

もう一人の白衣の男性が持っているポッドの中にいるちっこい少女は眠っているようだ。

「……何だ？この女の子を見ていると護りたい気持ちになってくる」

『主、それは恋と言う物では？後、管理局に連絡するか？』

ポッドの中にいるちっこい少女を見て青年が呟くと『マサムネ』が声をかけて答えた。

「ん、まずは此奴等全員縛り上げて、それから考えるさ！」

そう言って青年は白衣の男達に飛びかかった。

一分後。

「一丁アがりつと！」

見事に縛り上げられた白衣の男達とポツドの前に立つ青年が居た。

「さて、取り敢えず、この女の子出すとするか」

青年が拳を握り締めポツドに叩きつけると、甲高い音と共にポツドは砕け散り中に居た女の子が青年に倒れかかってきた。

「おつとと」

『主、なにか嫌な予感があるのですが』

青年が女の子を支えて抱き上げるとマサムネが警戒した様子で呟いた。

「大丈夫だろ…っ！？」

青年がマサムネを見て言おうとすると目に痛みがきて、女の子を落とさないようにして膝をつく。

『主！大丈夫ですか！？』

マサムネの心配そうな声が響く。

「あ、ああ。大丈夫だ」

「……」

青年が返事をしているといつのまにか女の子が目を開けていて青年を見ていた。

「ん、目が覚め……！？」

青年が女の子の視線に気づいてそちらを見ると女の子が全裸なのに気づいた。

「ま、マサムネ！服かなにないか！」

『それらしき物ならありますよ、主』

青年が焦って言うとマサムネは周りを物をサーチして教えた。その場にある青年が持ってきてその服を女の子に着せた。

「……………」

「えーっと、大丈夫か？名前解るか？」

じーと青年を見てる女の子を見て聞くと

『主、人に名前を訪ねるのなら自ら名乗るのが先なのでは？』

マサムネに突っ込まれ、青年ははっとする。

「そっぴゃ、そっぴゃ。俺の名前はリュウセイ。リュウセイ・サカキだ。君は？」

「……………私はツグミ。ツグミ・シュトロゼック」

リュウセイとツグミが互いに自己紹介を済ませた直後だった。

《警告 警告!》

研究施設内にけたたましい警告音が鳴り響く。

「な、なんだあ！何が起こったんだ!？」

『主、それがしの嫌な予感が的中したようですぞ』

「……私をポッドの中から出したからだと思う」

慌てるリュウセイとマサムネにツグミがポツリと呟く。

「なら、行くぞツグミ！此处から脱出する！マサムネ、セットアップ！」

「きゃあっ！」

『御意!』

リュウセイはツグミを片手で抱きかかえると、マサムネをセットアップする。

「行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ！」

「ふえっ!？え？あの、お兄ちゃふみゅっつっつっつ!？」

ツグミは悲鳴をあげながら、リュウセイの身体にしっかりとしがみ



ついていた。

『主、そこを右に行けば出口です』

「了解！」

「ふみゆみゆみゆ！！？」

マサムネの声に従いツグミを抱っこしたまま走る。

## プロローグ? 出会い (後書き)

感想と評価をお待ちしております

もしも、先にリュウセイがツグミと出会っていたら?  
という物語となっておりますよ

プロローグ？

ドカーン！！！

「はあはあはあ……！よっしゃあ！どんなもんだい！」

「ふみゅ〜」

間一髪、崩壊から逃げ出したリュウセイがふとツグミを見ると見事に目を回していた。

「ありゃ？」

『主、何時も通りに走り回ったのですか？』

マサムネの指摘に頭を掻いてうなだれるリュウセイであった。

「失敗したな〜」

『主、反省してるのなら別にいいですが。そろそろ野営の準備をしませんと』

リュウセイが苦笑いするとマサムネが伝える。

「そうだな。そうするか」

そう呟いてリュウセイは野営の準備をしてテントを張り、そこで焚火をする。

「みゆ…?」

「おっ、目覚めたかい?」

ツグミが目覚めた時には辺りは暗くリュウセイに抱っこされたままだった。

「みゆ… … / / はっ！ 遂和んじゃった / / /」

ツグミの中には別世界のつぐみの記憶があった為、遂リュウセイに甘えてしまったツグミであった。

「くす ツグミは甘えん坊だな」

そう言つてツグミの頭を優しく撫でるリュウセイだった。  
それがどこもなく心地よくて目を閉じるツグミがいた。

『主、これからどうなさいますか?』

「そうだな… ツグミをほっとくわけにもいかないし」

マサムネが聞くとリュウセイはツグミの頭を優しく撫でて考える。

「ツグミ、俺と一緒に旅しないか?」

「! … いいの?」

リュウセイはどこか不安そうなツグミを見て笑顔で言つとツグミは小首をかしげて尋ねた。

「おう！よく言うだろ、旅は道連れ世は情けってさ」

「行く！お兄ちゃんと旅したい！！」

リュウセイが笑顔で言うツグミは笑顔で答えていた。

「じゃあ、決まりだな。明日は早くに起きて近くにある街に行って服やら買おうぜ」

「うん！ありがとう、お兄ちゃん」

リュウセイはニカツと笑って言うツグミは嬉しそうに笑って抱きついた。

この時、ツグミのおおきなふくらみがあたっているのでリュウセイはなるべく我慢していた。

同時刻の第12管理世界フェディキア St・《セント》ワレリー港

上空をヘリコプターが飛んでおり、燃えてる建物があった。

「お疲れ様です。フェイトさん、ティアナ執務官！

押収物には該当しそうな品、ありませんでした」

眼鏡をかけて茶髪のロングの女性が言う

「そう。銀十字もディバイダ もここじゃなかったか」

金色の長い髪を一つにまとめている女性が呟いた。

「『エクリプス』の感染者を出すわけにはいきません」

「うん」

茶髪のロングヘアーの女性が銃機を持っている方が呟くと金髪のロングヘアーの女性が頷いた。

「もしも感染者が出たのなら」

「なんとしても捕獲しないと」

二人の女性は決意するように呟いた。

## ブローグ？（後書き）

感想と評価をお待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2084ba/>

---

魔法戦記バカテスForce ~ IF ~

2012年1月5日18時50分発行